

裁判の心理学：「証言」はどのような時に信用できないか

心理学は、世の中のさまざまな場面の人間の心の働きと取り上げてきました。今回は、裁判の中で証言をする時の「心理」をあつかった研究を紹介します。アメリカの女性心理学者ロフタスは、裁判の証言がどの程度信頼できるのかを心理学の実験によって明らかにしました。彼女は、ある裁判で幼児虐待の証言をした原告の証言の信憑性に疑問を持ち、その証言が「本人が気づかないうちに」作られてしまったものであることを指摘しました。このようなケースはしばしば裁判では問題になっており、アメリカの裁判では、証言の誤りによる多くの冤罪が報告されています。ある調査では、目撃証言によって有罪判決を受けた300人のうち、4分の3が後のDNA鑑定で無実であったことが判明しています。



このように証言がしばしば誤ってしまうのは、なぜでしょうか。ロフタスはその原因を解明するために心理学の実験を行いました。彼女は、実験に参加してくれたたくさんの人に交通事故の現場の写真を提示して、時間をおいて後でいくつかの写真を見せて、前に見た写真を選んでもらうテストを受けてもらいました。最初の写真には「停止」という標識が写っていました。参加者は半分は、写真を見た後で、実験者から質問をされましたが、その言葉の中にさりげなく「停止標識」という言葉が含まれていましたが、残り半分の参加者には「停止」が「徐行」という言葉に変えられていました。時間をおいてテストをしてみると、「徐行」という言葉を聞いた参加者が、最初の写真に「停止」ではなく「徐行」の標識があったと判断する人が増えてしまい、「停止」と正解できたひとは41%でした。

この実験は、事故を目撃した人でも、証言（テスト）までの間に誤った情報に触れると、気づかないうちに自分の記憶が影響を受けてしまうことを示しています。また、本人は自分の記憶が変わってしまっていることには、なかなか気づかないことも明らかになりました。このように私たちの記憶はさまざまな要因の影響を受けやすいということを知っておくことは大切です。記憶がどのようなことの影響を受けるのかが分かれば、正確な証言が可能になるかもしれません。記憶についての心理学に興味のある方は、認知心理学という分野で行われている記憶の研究を調べてみると良いでしょう。「TED ロフタス」と検索すると、ロフタス教授の講演を日本語字幕で見ることができます。